

イデックスオイルレポート ~For a week~

(株)新出光

【概況】

●29日、イスラエルとレバノンのイスラム教シーア派組織ヒズボラの停戦が27日に発効したが、イスラエル軍は28日、レバノン南部にあるヒズボラの関連施設を同日に空爆したと明らかにした。両者は互いの停戦違反を主張していることから、停戦合意の履行について不透明感が拡大。午前の相場は買いが優勢となり、一時**69.70**ドル付近まで上昇した。ただ70ドルを前に買いが息切れすると、利益確定の売りが出たもようで、相場は68.0ドルへ統落した。

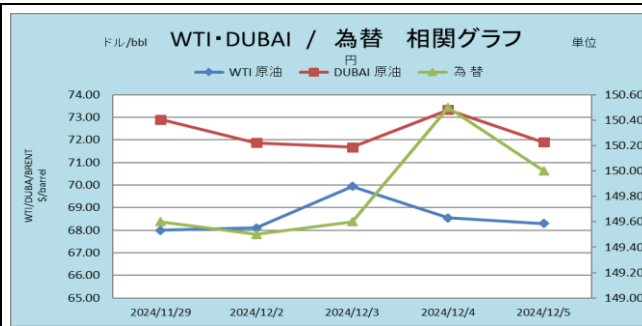
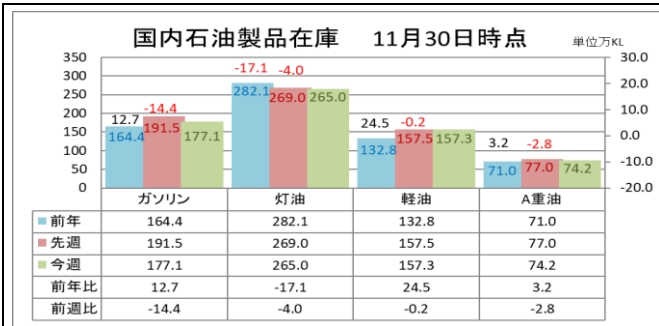
●2日、中国国家统计局、中国メディアの財新と米S&Pグローバルがそれぞれ発表した11月の製造業購買担当者景況指数(PMI)はいずれも景気の拡大・縮小を判断する節目の50を上回った。中国の需要が拡大するとの楽観的な見方から原油に買いが入った。中東情勢の緊迫化も相場の支援要因。イスラエル軍は1日、過去24時間にレバノン南部でイスラム教シーア派組織ヒズボラを標的に攻撃を行ったと発表したとの事で、相場は**68.10**ドルへ反発した。

●3日、ロイター通信によると、OPECプラスは5日に開催する閣僚級会合で、当初は2025年1月に予定していた自主減産の縮小を25年第1四半期末まで延長する公算が大きい。市場関係者の間では、25年4月まで自主減産を継続する可能性があるとの声も上がっており、相場は午前にも供給懸念からじりじりと上値を拡大し相場は**69.94**ドルへ統伸した。一方、市場はイスラエルとレバノンのイスラム教シーア派組織ヒズボラを巡る停戦の行方にも注目。ロイターによると、イスラエルのネタニヤフ首相は3日、ヒズボラとの停戦合意を順守すると発言する一方で、停戦は戦争終結を意味するものではないと警告した。

●4日、朝方までは堅調に推移。韓国とフランスの政局混乱やシリア内戦、さらにイスラエルによるレバノン政府への攻撃示唆など地政学的リスクの高まりも供給不安を後押しし、相場は一時70ドル台半ばに上昇した。しかし、米エネルギー情報局(EIA)が午前中に発表した週報では、ガソリンやディズェル燃料(留出油)など石油製品の在庫が市場予想を上回る積み増しを記録。原油在庫は大幅に減少したものの、徐々に売りが膨らみ、相場はマイナス圏に沈んで相場は**68.54**ドルへ反落した。

●5日、OPEC加盟・非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」は5日、オンラインで閣僚級会合を開き、協調減産を2026年末まで1年延長することで合意した。サウジアラビアなど8カ国による追加の自主減産は25年3月まで現状の削減量を維持することを決定。25年4月から26年9月にかけて段階的に削減量を縮小する方針とした。中国をはじめとする世界的なエネルギー需要低迷への警戒感や、OPECプラス以外の産油国の増産により供給過剰に陥るとの懸念を背景に、原油価格は下押しされ相場は**68.3**ドルへ統落した。

12月6日 16:00現在 WTI原油 68.18ドル 為替 1ドル 151.06円



次回元売変動予測 12/12~ 元売変動予測

ガソリン	→	-0.4~+0.1
灯油	→	-0.4~+0.1
軽油	→	-0.4~+0.1
A重油	→	-0.4~+0.1
LSA	→	-0.4~+0.1

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「-2.5円」、補助金は、「-15.2円・60%」、都合「-1.4円」の改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの2日時点の小売価格平均は175.4円となっております。

《12月12日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「-1.0円~-0.5円」、激変緩和補助金は「-14.6円・60%」の見込みで、都合「-0.4円~+0.1円」の改定予測となっております。

※原油コスト「-1.0円~-0.5円」
 ※激変緩和補助金「-14.6円」前週比+0.6円
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】 <アンモニアの常温常圧合成、安価に 東大など>

東京大学の西林仁昭教授らは、常温常圧でアンモニアを安価に合成する技術を開発した。反応物を砕いて反応しやすくし、高価な有機溶媒を使わずに合成する。コストを抑えた実用的なアンモニア合成手法の開発につながると期待される。

アンモニアは窒素ガスと水素ガスを用いて合成する。ただ、原料の窒素ガスは化学反応しにくいので、工業的なアンモニア合成で用いられる「ハーバー・ボッシュ法」では、セ氏約500度の高い温度と100気圧以上の非常に高い圧力を必要とする。さらにもう一つの原料である水素ガスの製造には化石燃料を用いるため、環境負荷が大きい。西林教授らは、2019年に金属元素のモリブデンを含む特殊な触媒を使い、常温常圧でのアンモニア合成に成功した。水素ガスの代わりに水などを用い、窒素ガスと還元剤のヨウ化サマリウムを有機溶媒の中で反応させる。ただ、反応物を溶かすための有機溶媒が非常に高価だった。研究チームは新たに「メカノケミカル反応」を利用し、有機溶媒を使わないアンモニア合成に成功した。メカノケミカル反応は固体か少量の液体同士の化学反応で、反応物を砕くなどの機械的な刺激を与えて反応しやすくする。研究チームは水と固体のヨウ化サマリウムとモリブデン触媒を反応装置の中で機械的な刺激を与えて反応させた。水だけでなくセルロースも水素原子の供給源として使えた。セルロースは植物に大量に含まれる物質で豊富に存在する。メカノケミカル反応で用いる反応装置はそのまま大型化するのには難しい。ただ、高価な有機溶媒を使わないため、研究チームは製造コストを約100分の1に抑えられる可能性があるとみている。西林教授は「窒素と水からアンモニアを合成できれば窒素循環社会の実現につながる」と語る。環境負荷の小さいアンモニア合成の実現に向けて、企業でも取り組みが進む。出光興産などは、西林教授の技術を用いて実証プラントでの研究に取り組んでいる。その他にも東京科学大学発スタートアップのつばめBHB(横浜市)では、科学大の細野秀雄名誉教授らが開発した「エレクトライド触媒」を利用したアンモニア合成技術の開発を進める。